夏目漱石『坊つちやん』から魯迅「阿Q正傳」への展開

――牧卷次郎「滿州問題」・「夜の支那人」事件と「幻灯事件」との照合および「淸」と「吳媽（ウーマー）」という女性像の系譜

藤井省三

（一）元北京特派員の講演「滿州問題」

一九〇九年九月、夏目漱石（一八六七～一九一六）は大學豫備門時代の親友、中村是公（一八六七～一九二七）に招かれて、滿州を三週間あまり旅している。中村は當時、南滿州鐵道株式會社（滿鐵）總裁で、「新聞屋」[1]の漱石に滿州を世間に廣く紹介して欲しかったことだろう。中村が漱石宅を訪ねて滿州に誘うのは七月三一日のことだが、五月五日には門下生中村古峽（一八八一～一九五二）の滿州旅行のために漱石は中村是公に紹介狀を書いている。[2]

一〇月から一二月まで『東京朝日新聞』に連載された旅行記「滿韓ところ〴〵」は、「南滿鐵道會社つて一體何をするんだいと眞面目に聞いたら、滿鐵の總裁も少し呆れた顏をして、御前も餘つ程馬鹿だなあと云つた」[3]という舊友同士の打ち解けた對話で始まる。おそらく漱石は「眞面目に」日本にとり滿鐵とは何か、という疑問を抱いて滿州を旅したものの、執筆時には未だ確答は得られなかったのであろう、同作は交遊錄に終始して批評的視點を缺いている。漱石が納得しうる答えを得たのは二年後の一一年八月、巡回講演團に參加し講師仲間の牧卷次郎（一八六八～一九一五）と親しく交流した際のことではあるまいか。この巡回講演團は大阪朝日新聞社が主催した夏期講演會であり、[4]同社通信課長の牧は義和團事件から日露戰爭まで五年間の北京特派員を勤めており、講演「滿州問題」で複雜なる、外交問題の滿州をめぐって次のように解說している。

米國は今日迄他國の事には、手を出さない、嘴を容れないといふ、所謂モンロー主義を執つて居たのであります、が、近來は此のモンロー主義を抛つて、布哇を合併し、玖馬を合併し、比律賓を合併し、追々東洋問題にまでも發言權を、要求することゝなつて居る、ローズベルト氏でも、タフト氏でも、支那問題といふことに就ては、特に力瘤を入れることゝなつて、淸國人の歡心を買ふことに就ては、孜孜汲々〔ママ〕惟れ日も足らずである、淸國人の眼には滿州に於ける日露牽制に就いては、米國に信賴するより外に取る可き途はない。

そして米國さえも「二十世紀の流行思想」の帝國主義の道を歩み始めており、「日本の如き新興國が、此の帝國主義を採つて新領土を海外に開くといふこと」は「自然の勢」と認めつつ、「併し盲目滅法に

他國の領土を占領するとか侵略するとかいふ、無法なことは勿論爲し得可きこと」ではなく、「滿州問題の爲に、清國全體の利益を失ふといふやうな事があつてはなりませぬ〔中略〕清國は勿論能ふだけ列國の嫌疑を避けて、東洋の平和保障といふことに根本方針を措いて、清國の領土保全、機會均等主義は、何處までも尊重して行かなければならない」と主張している。[5] 牧に續けて登壇した漱石が、「牧君の滿州問題」は「大變條理の明かな、さうして秩序のよい演說」[6]であつたと前置きしたのは社交辭禮ではあるまい。

中國で辛亥革命が勃發したのはそれから二か月後の一〇月一〇日のことであつた。漱石は講演先の大阪で胃病を患い入院、歸京後には痔の切開もしており、日記を再開したのは一一月一一日のこと、病院で知り合つた中國人留學生と交わした革命をめぐる噂話を記したのち、次のような感想を述べている。「革命の勢がかう早く方々へ飛火しやうとは思はなかつた。一ヶ月立つか立たないのに北京の朝廷は殆んど亡びたも同然になつた樣子である。痛快といふよりも寧ろ恐ろしい。／佛蘭西の革命を對岸で見た〔ママ〕ゐた英吉利と同じ教訓を吾々は受くる運命になつたのだらうか[7]」

一七八九年のフランス革命は、產業革命のまつただ中にあつた英國民衆に大きな衝擊を與え、急進主義運動を引き起こしており、これに脅威を覺えた英國政府は、徹底した彈壓をもつてこれに應えた。バイロンらロマン派詩人はナポレオン戰爭に至るまでの大陸の動向に大きく影響を受けている。[8] 英文學者であつた漱石が辛亥革命勃發時に日本の受けるべき運命をフランス革命時の英國に喩えたとき、彼は民衆と文學者の急進化やこれに對する政府側の反動政策を想起していたことだろう。

（二）「夜の支那人」事件

漱石は小說『それから』起稿からひと月餘り後、滿州旅行約二カ月前の一九〇九年七月三日土曜日の日記に、不氣味な中國人來訪事件を記している。

朝六時頃地震あり。夜支那人來る。格子の前に立つて此處を開けろといふ。どこの誰で何しに來たかと問へば、私あなたのうちの事みんな聞いた。御孃さん八人下女三人、三圓といふ。まるで氣狂なり。返れといふに歸らず、ぐづ〳〵すると巡査に引渡すぞといつたら私欽差ありますと云つて出て行つた。怪しからぬ奴也。[9]

朝六時頃の地震とは「稍强き非破壞的」强震であつた。あるいは漱石は『それから』の主人公代助の如く「地震が嫌きらひ」で、「瞬間の動搖でも胸に波が打つ」たのであろうか。[10] 日記によれば、漱石自身が格子戸越しに中國人の相手をしたかのように讀めるのだが、たとえば芥川龍之介は漱石邸について「呼鈴を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて、束髮に結つた女中が一人、すぐに格子戸の掛け金を外してくれる」と記している。[11] 實際に翌七月四日の漱石日記を讀むと、事件當夜に中國人客に對應したのは漱石ではなく、夏目家の書生あるいは女中のようでもあり、しかも客の人數は四人に增えてもいるのだ。

西村を警察へやる。夕べの支那人は四人にて下女を前後より擁し自分等の聞く事を答へないとひどい目に逢はす抔と威嚇したる由。且つ其前に下宿をさせて吳れと云つて來て、待つてゐる時に蝙蝠傘で御房さんの臀をつつきたる由。言語道斷なり。[12]

警察に行つたという西村誠三郎（號は濤蔭[13]）は生沒年未詳にして一八八五年頃の生れ、〇九年六月から漱石宅の書生になり、同年一一

月漱石の斡旋で就職のため大連に出發[14]、その後は『滿州日日新聞』記者や滿州宣傳協會長をつとめ、滿州國紹介の二二〇頁ほどの『滿州物語』（一九四二）を書いている。西村はあたかも「夜の支那人」に導かれるように中國に渡って行ったのだ。そして「御房さん」こと山田房子は當時二一歳、漱石夫人の夏目鏡子の從妹で、「小さいうちに家が零落して、親子共私の父が面倒を見て居りましたのですが、其うちに叔母は死に、兄は奉公に出て、そのお房さん一人が私の母の元に居りました[15]」というからには、漱石家では「下女」というよりは家族に近い女性であった。房子は漱石家で一八歳から二二歳まで家事手傳いをしており、同時期には書生の西村の妹が「もう一人手助けに居た」もようである[16]。漱石日記によれば、前夜の中國人は四人、この「下女」の房子にセクハラをしており、しかもそれを漱石が知ったのは事件翌日のことだともいう。

實はこの時期の漱石は『それから』の執筆に苦しんでいた。そして房子自身が後年の談話で「旦那様といふ方は、あれですわまあ神經衰弱が高じたとでも申しますかね、時々氣が變になって、奥様のお留守中に女中さんを二人まで追い出しておしまいになった」と語っている[17]。鏡子によれば「洋行からかへつて來て〔中略〕全くお話にならない亂暴を家のもの、ことに私にしますので〔中略〕精神病學の吳さんから診て貰ひましたところ、それは追跡狂という精神病の一種」「一生なほり切るといふことがない[18]」と診斷されたという。鏡子は幻聽幻覺を生じた漱石が「自分の頭の中でいろ〳〵なことを創作して、私などが言はない言葉が耳に聞こえて、それが古いこと新らしいことといろ〳〵に連絡して、幻となつて眼の前に現はれる」とも述べている[19]。

事件五日前の六月二八日に漱石は「滿洲より歸りて來る」中村古峽から土産話を聞き、日記に「ハルピン迄行つた由。露語不通色々失敗」と記している[20]。このとき古峽は中村是公の漱石招聘プランを傳えていたのかも知れない。事件二日後の七月五日に漱石が「雨。昨夢に中村是公佐藤友熊に逢う。又青樓に上がりたる夢を見る[21]。」と記しているからだ。青樓とは賣春宿のこと。そもそも『それから』とは「公娼制度を軸とした買賣春の問題に焦點」をあてた小説でもあるのだ[22]。事件當夜から翌日にかけても、漱石は「神經衰弱が高じ」て「追跡狂」を發病し、中村の滿州旅行の土産話と自らの滿州旅行の豫感、『それから』主人公の代助らが通う妓樓の物語とが渾然として、漱石の頭の中で「夜の支那人」事件が妄想されたかと推定される。

それにしても漱石が「巡査に引渡すぞ」と警告したのに對し、中國人が「私欽差あります」と答えている點は意味深長だ。欽差とは皇帝の命で派遣される使臣のことで、明治日本にとって最もなじみ深いのは日清戰爭の下關條約（一八九五）や義和團事件の對外賠償議定書（辛丑條約、一九〇一）締結に際し全權を勤めた李鴻章であろう。一九世紀末以來、中國は日本や歐米の軍隊に本土を占領された際に、欽差大臣を送り出してきたのだ。ちなみに漱石は小説『道草』（一九一五）では「過去の亡靈」である養父島田に突然「李鴻章の書は好きですか」と質問させて、主人公健三を困惑させている。そして『坊つちやん』（以下『坊』と略す）に描かれる「うらなり君」送別會で、赤シャツの從者格の畫學教師野だいこが藝者たちを前に、「丸裸の越中褌一つになって、棕梠箒を小脇に抱い込んで、日清談判破裂して……と座敷中練りある」く姿[23]とは、日清戰爭後に李鴻章を相手に結ばれた下關條約に浮かれる「大日本帝國」の戯畫なのであろう。

その「欽差」ら四人が「御孃さん八人下女三人、三圓」と要求し、

「蝙蝠傘で御房さんの臀をつつ」くというセクハラを働いた、と記されたのはなぜだろうか。漱石と鏡子との間には一八九九年生まれで當時一〇歳の筆子を筆頭に、恆子、榮子、愛子、純一、伸六と四人の娘と二人の息子がおり[24]、漱石家の「下女」は房子のほか前述の書生西村の妹しん（呼び名は、梅）がおり[25]、梅は一九一一年五月、「漱石夫妻の援助と媒酌により結婚した」という[26]。四人の「支那人」が數え上げた合計一一人の女性とは、實際の夏目家の女性數とは食い違ってはいるのだが、これらの女性に對する「三圓」という對價らしき値段を提示したのはなぜだろうか。三圓とは青樓の夢と關係があるのだろうか。當時は蕎麥が三錢、巡査の初任給が一二圓の時代である[27]。

中國人多數による暴行と欽差大臣の登場――これから義和團事件（一九〇〇年）が連想されよう。義和團とは、アヘン戰爭から日清戰爭後の三國干涉（一八九五）後の佛、獨、露、英による租借事件に至るまで激化してきた歐米・日本の侵略に對する、中國民衆の抵抗であった。これらの點を考えると、「夜の支那人」の「御孃さん八人下女三人、三圓」という言葉は、侵略戰爭における歐米・日本による中國人女性への性的侵害に對する報復ではあるまいか。「夜の支那人」事件とは「神經衰弱」氣味の漱石が妄想した中國人による報復と、この自らの妄想に對する漱石の恐怖に由來すると考えられよう。もっとも事件の五カ月ほど前まで、漱石の舊居に五人の中國人が住んでいたのも事實である。その內の一人は、日本軍による中國人殺害の惡夢と漱石への憧れで醫學校を中退し、文學運動を始めていた魯迅であった。

（三）魯迅の東京留學と漱石文學との出會い

魯迅は一九〇二年三月から〇九年八月まで七年半を日本で過ごしており、その間二度の歸省（一九〇三年七月と〇六年七月）および仙臺醫學專門學校在籍期間（一九〇四年九月～〇六年三月）を除いて、東京の空氣を吸いながら二〇歳から二八歳までの多感な青春期を送った。一年半の仙臺醫專在學中にも、春夏冬の長期休暇中には東京に戻っている。當時の東京は新興帝國の首都として著しい變貌を遂げつつあり[28]、日清戰爭後には「戶口調査に際しその職業を「著述業」「小說家」と稱する者も現れるほどの文學ブームの場となっていた[29]。東京帝國大學文學部講師として英文學を講じていた漱石が、〇七年に教授就任を斷って朝日新聞社に入社し職業作家の道を選んだのは象徵的な事件である。

魯迅は〇四年四月仙臺醫專に入學、解剖學教授の藤野嚴九郎から懇切丁寧な指導を受けたが中退してしまう。「『吶喊』自序」によれば、ロシア軍スパイを働いた中國人が中國人觀衆の見守る中で日本軍兵士によって首を切られる日露戰爭幻灯畫を講義中に見て、「愚弱な國民」はたとえ屈强な體格であってもせいぜい見せしめの材料かその觀客ぐらいにしかなれぬ、まず彼らの精神を改革すべきでありそのためには文學藝術を選ぶべきだと考えたからだという[30]。この魯迅自身の「幻灯事件」說に最初に異論を唱えたのが太宰治（一九〇九～四八）の傳記小說『惜別』（一九四五）で、その物語は東北地方某村の開業醫が「四十年も昔」の仙臺醫專での同級生魯迅との交友、擔任教授藤野先生との交流を回想するという形式で語られている。老醫師は魯迅が中退した原因を「日本の當時の青年たちの間に沸騰してゐた文藝熱[31]」に求めているのだ。元々文學を愛好していた魯迅が、「幻灯事件」に背中を押されるようにして醫學から文學へと轉じた、というのである。

二度目の東京暮らしでは、魯迅はもっぱら書店・古書店そして洋書

店の丸善で雑誌・書籍を買い漁っては文藝評論と歐米文學の紹介に沒頭するいっぽう、漱石に深い關心を寄せている。一九〇六年より東京で魯迅と起居をともにしつつ、その文學運動の最大の協力者となっていた弟の周作人は、つぎのように證言している。

彼は日本文學には何らの興味も覺えず、ただ夏目漱石一人には感心して、彼の小説『吾輩は猫である』『漾虛集』『鶉籠』『永日小品』から無味干燥な『文學論』にいたるまで皆買ってきていた。また彼の新作『虞美人草』を讀むために『朝日新聞』を定期購讀し、のちに單行本となって出版されたときも買いに行った。[32]

『東京朝日新聞』は一九〇七年四月二日に「社告」を掲載し、二行分の大活字で「新入社は夏目漱石君」と宣言しており、漱石も五月三日の同紙に「入社の辭」を寄稿している。こうして入社後の漱石が六月二三日より『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』とに『虞美人草』を連載し始めると、魯迅は毎朝下宿の寢床で中級品のタバコ敷島をくゆらて朝刊小説欄を眞っ先に開くようになったのである。[33]。魯迅自身も三三年執筆の回想記で、當時愛讀した作家として漱石の名を擧げている。[34]一九二三年周作人との共譯で一五人の作家の短篇小説三十作を收める『現代日本小説集』を出版した際には、魯迅は小品集『永日小品』から「懸物」と「クレイグ先生」を選んで翻譯した。魯迅は同書附錄「作者に關する説明」の「夏目漱石」の項では、つぎのように述べている。

夏目漱石（Natsume Soseki, 一八六七～一九一七）名は金之助、はじめ東京大學教授となり、のちに辭職して朝日新聞社に入り、專ら著述に專念した。彼の主張するところはいわゆる「低徊趣味」であり、また「餘裕のある文學」とも稱した。一九〇八年高濱虛子の小説集『鶏頭』が出版されたが、夏目は彼のために序を書いて、彼らの一派の態度について説明している。〔中略〕夏目の著作は想像力の豐富さと、文章の精美なることをもって稱されている。初期の作品である俳諧誌『ホトトギス』に掲載された『坊つちゃん』『吾輩は猫である』の諸篇は輕快洒脫にして、機智に富んでおり、明治文壇において新江戸藝術の主流であり、當時はならぶものがなかった。〔後略〕[35]

東大講師だった漱石を教授と紹介したのは、魯迅の漱石に對する敬愛の念による錯角であろうか。魯迅は『坊』を『哥兒』と、『吾輩は猫である』（以下「『猫』」と略す）を『我是猫』、「懸物」を「掛幅」、「クレイグ先生」を「克萊喀先生」と中國語譯して、それぞれに（Bocchan）等と括弧内にローマ字讀みを振っている。[36]

魯迅・周作人兄弟は、東京時代に幾度かその住居を變えており、伍舍は一九〇八年四月から一〇ヵ月ほどの間、他の三人の留學生と共同生活を送った家である。[37]東京市本郷區西片町十番地ロノ七號（現在は文京區西片一丁目十二番地八號）にあったこの家には、〇六年一二月二七日から〇七年九月二九日まで漱石一家が住んでいた。[38]當時漱石は借りて一年もたたぬうちに家賃を二七圓から三五圓に値上げされることとなり、憤慨して早稻田南町へと引越して行ったのである。空き家になっていたこの屋敷を見つけ出した許壽裳は、高い家賃を捻出するため、親友の魯迅兄弟ら五人による共同生活を考え出している。

魯迅は弟周作人との共譯で一九〇九年三月と七月に、ロシア・東歐・英米佛等の當時世界的に流行していた作家の短編を中國語譯した『域外小説集』二卷を刊行、三宅雪嶺主催の雜誌『日本及日本人』同五月一日號の「文藝雜事」欄で「本郷に居る周何がしと云う、未だ

二五六歳の支那人兄弟」による試みとして紹介されてもいる。漱石が伍舎や『域外小説集』の噂を聞いて、「夜の支那人」事件を妄想した可能性も否定できないであろう。あるいは漱石の怪談風短篇小説「琴のそら音」（一九〇五年五月發表）のように、日中二人の作家による靈的交感であったのだろうか。それはともかく、魯迅は「阿Q正傳」執筆において漱石と深く交感しているのである。

（四）坊つちやん――阿Qの系譜

日本の敗戰から三年後の一九四八年、竹内好は『坊』と『阿』を比較して、次のように指摘している。

無力な正義派という「坊ちゃん」〔ママ〕の主人公は、萬人の胸に同情をよぶが、愚劣と惡德のかたまりである「阿Q」のように、その同情をはねかえす力はもっていない。〔中略〕藝術的完成では「阿Q正傳」は、はるかに「坊ちゃん」に及ばない。〔中略〕「阿Q」は、今日では、一切の進歩の敵の象徴と見なされている。げんに毛澤東の整風運動は「めいめいが努力して自分のなかから阿Q的なものを追放すること」を目標にかかげている。人類の不平等が、そしてそれに伴う虚僞がつづくかぎり、人間の愚劣さが改まらぬかぎり、「阿Q」は生きつづけるだろう。[39]

竹内は「無力な正義派」の坊っちゃんと「愚劣と惡德」の阿Qとを對比し、『阿』が「藝術的完成」では『坊』に及ばないものの思想性では『坊』に勝ると評價したのである。八六年に米田利昭はこの竹内の意見を受けて、後述の平岡敏夫の『坊』論[40]をまとめ、「共に、革命英雄譚であり、文明批評である。いいかえれば、典型的人間の造形を通して國民性をえぐり出している」と、『阿』の小説的評價を高め、兩作を「文明批評」において對等に置いた。しかも兩作間に「影響とか模倣とかはなくとも」と前置きして魯迅の獨創性を確保し、「阿Qの同情をはねかえす力は、作者の魯迅が一人で、社會通念とは非妥協に生きている力である」と、竹内と同様に魯迅を思想性において漱石よりも高く評價した。[41]

二一世紀に入ると、中國の日本文學研究者である潘世聖が『阿』と『猫』を詳細に比較して「一番の共通點はやはり作家の内部に沸騰する激しい批判・戰鬪の精神」であり、魯迅にとって『猫』の「獨特のユーモアや笑いの藝術的技法よりも、その精神、思想の衝動力の方がはるかに強かった〔中略〕漱石の創作が後に知識人の内面世界の探究へと轉じていったのに對して、魯迅は終始「啓蒙主義」、即ち社會批判の方向を堅持した」と指摘している。[42]潘は兩作の社會批判の思想的共通性に注目した上で、啓蒙主義の貫徹を魯迅文學の特徴と評價したのである。一方、同じく中國人の日本文學研究者である欒殿武は『阿』と『猫』における「笑いのレトリック」の手法の共通點に對する詳細な考察を行い、『猫』から『阿』への影響を「饒舌的な表現法と語りの手〔ママ〕の揶揄的な口調という二點」に絞っている。[43]潘・欒兩著は『猫』『阿』間の影響關係を十分に論證しているが、私はむしろ『坊』と『阿』との影響關係を重視したい。それは兩作が共に共同體から孤立した特異な個性の主人公を設定した上で、彼らの生死を通じて國民性批判を行うという屈折した物語構造を共有しているからである。

『坊』は一九〇六年三月に執筆され『ホトトギス』四月號に發表された。同作の主人公に關しては、作品發表直後に漱石自身が雜誌インタビューで「坊つちやんと云ふ人物は或點までは愛すべく、同情を表

すべき價値のある人物であるが、單純過ぎて經驗が乏し過ぎて現今の様な複雜な社會には圓滿に生存しにくい人」と解說しており[44]、多くの批評家が「或點までは」という留保を外し、「現實には存在し得ぬ「妖精」」（江藤淳[45]）等の愛すべき單純な性格の坊っちゃんによる日本人批判と評價してきた。八四年に井上ひさしが披瀝した「江戸っ子＝よき日本人は、もう四國の都市＝現世にはいない[46]」という說は、その典型である。これに對し前述の平岡論文は、坊っちゃんと「下女」である「婆さん」の「清（きよ）」との間の「東京―四國という距離を、死と生の距離に置きかえ、生死をわかつことによって、それゆえにこそいっそう切實でありうる愛の存在を思い描く[47]」という斬新な讀みを展開した。最近では柴田勝二が「主體的な自己認識を自身に與えることができず、對他者的な關係において未熟さを示しつづける」坊っちゃんを「明治日本の寓意[48]」として捉え、赤シャツを「西洋列强の暗喩として括り」出し、うらなりを「西洋列强に對しては明確な自己主張をすることができず、そのいいなりになる無力さをさらけ出してしまう、明治日本の否定的な側面の寓意化」と解釋し、特にうらなりの婚約者マドンナを、「帝國主義的な欲望の對象としての〈中國〉に相當する存在」と指摘する。赤シャツが「列强の暗喩」であるとしたら、これに鐵拳制裁を加える坊っちゃんに、魯迅は共感を覺えたことだろう。また柴田勝二の地政學的構圖から消去された「下女」の清とは、近代以前の日本が「世話ニナツタ隣」（『漱石全集第十三卷』四九頁）國、清朝およびそれ以前の傳統中國の暗喩とも讀めるのかもしれない。

欒殿武は一九九八年の論文で、日本の『坊』研究を踏まえつつ、同作と『阿』との比較研究を試みて、「主人公の性格の特徴の象徴的把握、それによる作者の世界觀の明白な表明、自國の國民性の一側面の描出、そして、主人公の失敗談による物語の展開、滑稽な表現手法などの面において、共通した底流がはっきり存在している」という結論に達している[49]。欒論文は『坊』『阿』兩作の異同を丁寧に分析しており、その論旨には說得力があるが、漱石が坊っちゃんを「江戸っ子の典型的な特徴を一身に集めた古き好き時代の日本人の「善」の化身[50]」と描いたと考えるいっぽう、魯迅は「卑劣、憶病、無恥、狡猾、エゴイズム、盲從など、中國人の國民性の暗黑面」のすべてを「阿Qの一身に描いた」と解釋し、さらには「國民性に對して、漱石は明るい面を、魯迅は暗い面をポイントにおいて描いただけの違いである」とまとめている[51]。これは竹內の「無力な正義派」對「愚劣と惡德のかたまり」という漱石・魯迅比較論の系譜に屬する批評と言えよう。こうして竹內好以來六〇年間にわたる漱石・魯迅比較論は、兩作家の分斷から影響關係の確認へと進み、『坊』と『阿』との差違を明暗相い反する國民性描寫に求めるに至った。しかし、兩國の國民性を背負った兩作の主人公は、果たして明暗相い反する人物なのだろうか。

『坊』において主人公が氏名不詳であることは、たとえば江藤淳が坊っちゃんと赤シャツは「讀者がついにその名の何たるかを知らぬこと」において同樣である、と指摘している[52]。そして江藤は「「坊つちやん」というような「渾名」」とも記述するのだが、實は『坊』において主人公を「坊つちやん」と呼ぶ者は誰一人としていない。清さえも、「臺所で人の居ない時に「あなたは眞つ直でよいご氣性だ」と賞める事が時々あつた[53]」と常に彼を「あなた」呼ばわりしており、彼女が「坊つちやん」という言葉を發したとされるのは、「おれの來たのを見て起き直るが早いか、坊つちやん何時家を御持ちなさいますと聞

いた」という、カギ括弧が外された主人公自身の語りの中においてなのである。すなわち漱石は『坊』の主人公を名前もあだ名もなく、「坊つちゃん」を自稱する人物として明示しているのだ。[54] ちなみに野だいこは「あのべらんめえと來たら、勇み肌の坊つちゃんだから」[55]と語るが、その用法は魯迅愛用の國語辭典が「坊つちやん」の第二の意味として擧げる「世事に通ぜざる男をあざけりていふ稱」と考えられよう。[56]

「坊つちやん」像に「暗黑面」を指摘する研究者も少數だが存在する。たとえば渥見秀夫は、坊っちゃんの幼少期から四國時代に至るまでの對人關係が、①威張る→②相手の常識的對應に威嚇を感じる→③非常識的に對應する→⑤笑われる→⑥淸を思う→①威張る、という「圓環構造を有する」ことを指摘した。[57] また成模慶は、主人公が初日の授業から辭職前の師範學校生との喧嘩事件翌日の授業に至るまで、「自らが「教師」としてどうあるべきかを意識したこともなければ、教師として學生と直に接しているふしも見當たらない〔中略〕生徒とのコミュニケーションの可能性〔中略〕を拒んでいる」と分析している。[58]

『坊つちやん』の主人公は名前もあだ名もなく「坊つちゃん」を自稱し、兩親は病死し、兄からは父の遺產の一部と引き換えに緣を切られたため家族はおらず、同僚や生徒、そして地域からも孤立している。少年時代に西洋製ナイフの切れ味を證明しようと無鐵砲にも自分で右手の親指の甲をはすに切り込んだため「死ぬ迄消えぬ」「創痕」が殘っており、物語の終末部では生徒同士の亂鬪に卷き込まれて顏に傷を負う。[59] 彼は手と顏の傷により頭に幾つも「疥癬あとのハゲ」がある阿Qを連想させると共に、「阿Q正傳」冒頭で語り手が告白する「頭の中にはお化けでもいるかのよう」な氣配を漂わせるのだ。

魯迅は生涯にわたり漱石を愛讀しており、特に『坊』への關心は深かった。東京留學時代に同作を收錄した『鶉籠』（一九〇七年一月）を、そして上海時代にも岩波文庫版『坊』第四版（一九三一）を購入している。[60] 新潮社一九一八年一一月刊行の畫家近藤浩一路（一八八四―一九六二）による『漫畫坊つちやん』を周作人が翌年七月の訪日時に購入しており、魯迅は同書を弟の日本土產の一册として讀んだことだろう。同書が三三年四月一日に新潮文庫で再版された際には、上海在住の魯迅は、刊行と同時に上海の內山書店で購入している。[61] 岩波書店より決定版『漱石全集』（一九三五～三七）刊行が始まると、魯迅は毎月の配本を內山書店を通じて購入し、『坊』收錄の同全集第二卷は一九三六年五月二日に魯迅宅に届いている。[62] 同年一〇月一九日に病沒した魯迅は、『坊』との最晩年での再會を果たしていたのだ。

そのような魯迅の『坊』に對する深い思い入れは、彼が坊っちゃんに相當する二つの中國語の「哥兒（コール、拼音表記は ger）」と「少爺（シャオイエ、拼音表記は shaoye）」とを使い分けていたことからも推察できる。『魯迅全集』では作品などからの引用を除くと、「少爺」はおよそ六〇個所で、「哥兒」は一四個所で用いられており、「少爺」の方が使用頻度は壓倒的に高い。ところが自傳的小說では魯迅自身をモデルとする人物には、「少爺」ではなく、「哥兒」の敬稱を用いている。たとえば短篇小說「故鄉」では「豆腐西施（とうふせいし）」の楊おばさんや少年時代の閏土が、語り手を〝迅哥兒（迅坊っちゃん）〟と呼ぶように。これ對し地主の息子としての階級性を强調する場合には、「初めて彼〔閏土〕に會ったのは、まだ十いくつのころで〔中略〕暮らしむきも良く、僕はまさにお坊っちゃまだった」[63]と「少爺」を使うのだ。

さて魯迅作品で二人の「少爺」が登場するのが『阿』である。「少爺」の一人は趙家の大旦那（原文：趙太爺）の息子、彼は結婚し科擧の豫備試驗に合格して「秀才」の雅稱を得ているためか、趙若旦那（原文：趙大爺）あるいは趙秀才、秀才旦那（原文：秀才大爷）、秀才と稱されている。もう一人の「少爺」とは、阿Qの住む未莊村で趙家と竝ぶ二大地主である錢家の大旦那（原文：錢太爺）の長男である。彼はまず縣城〔縣都のこと。縣は日本の郡に相當する行政單位〕に行って西洋式學校に入ったのち、「なぜか日本に行き、半年後に歸ってきたときには、曲がっていた膝が外國人のように伸びており、弁髪もなくなっていた」[64]ため、阿Qから「にせ毛唐〔けとう〕（原文：假洋鬼子）」のあだ名を付けられている。秀才とにせ毛唐は成人であるため、「少爺」と呼ばれることはないが、幼少期にはそのように呼ばれていたことだろう。

未莊という物語の舞臺は酒屋と茶館各一軒しかない「もともと大きい村ではな」[65]いと設定されており、阿Qはこの未莊の日雇い農民で、當時であれば中年と見做される「三十而立」の歳にさしかかってはいるものの、名前も定かでない。秀才が科擧豫備試驗に合格した吉日に、阿Qは、これは自分にとっても光榮だ、なぜなら彼と趙大旦那とは本來は同族で、彼は秀才よりも三代先輩なのだ、と吹聽したので、趙の屋敷に呼び出され、大旦那に平手打ちされてしまう。村の人々も普段から阿Qをいじめて笑いものにしているが、阿Qは「自分で自分が自己輕蔑の第一人者であり、「自己輕蔑」を取ってしまえば、殘るのは「第一人者」である。狀元〔科擧最終試驗の合格者である進士の中でもトップ合格者〕だって「第一人者」だろうが？[67]」などという精神的勝利法で自己滿足していた。しかし若い尼僧にセクハラをして彼女から「「罰當たり、子孫が絶える阿Q！」と罵られ、死後には「誰も茶碗一杯のご飯もお供えしちゃあくれない、‥‥女がいるんだ[68]」と思い詰めた阿Qは、趙家の女中である吳媽に無器用な求婚を行い、ひと騷動を起こしてしまう。こうして秀才に天秤棒で毆られ村での雜役も失ったため、縣城へ行き、盜賊の手傳いをして稼いだ金や盜品の衣類を持って再び未莊に歸還する。その後、辛亥革命の噂にあわてふためく地主たちを見て阿Qも革命黨に憧れるが、にせ毛唐や秀才らがさっさと革命黨を組織してしまい、阿Qには出る幕もない。やがて趙家で起きた强盜事件の犯人として逮捕され法廷に引き出された阿Qは、わけも分からぬうちに死刑判決を受け、銃殺されてしまうのであった。

『阿』は北京の新聞『晨報』に一九二一年一二月四日から翌年二月一二日まで連載されたのち、二三年八月、北京・新潮社刊行の魯迅の第一創作集『吶喊』に收錄されており、日本語譯は四〇〇字詰め原稿用紙約一〇〇枚となる。同作を雜誌『ホトトギス』に一擧掲載された漱石の『坊』（四〇〇字詰め原稿用紙換算で約二三〇枚）[69]と比べると、半分以下の枚數である。『阿』と『坊』とでは、作品の長短や連載か一擧掲載かという相異があるだけでなく、主人公の境遇も大に異なる。阿Qが中國農村社會の最底邊の人間で、讀み書きどころか筆の握り方さえ知らないのに對し、坊っちゃんは淸のような「下女」を雇う大都會の中產階級の家の次男で、物理學校を卒業して舊制中學の數學教師を勤めた準エリートである。[70] 坊っちゃんの社會的地位は阿Qよりも遙に高く、『阿』の中の秀才やにせ毛唐のそれに類似するといえよう。

その一方で前述の欒論文は坊っちゃんと阿Qとの性格的類似性を前者の「强がり」と後者の「減らず口」に見出す外に、兩作が「共に主人公の視點を中心として、物語を展開している」點を指摘し、兩主人

公の視點が共に「上から下への鳥瞰であり、しかも自己中心的で、主觀的」であること、「よその人間としてその土地の住民に對して批判的で、また對抗した。結局、彼らに陷れられ、不幸な結果を招いてしまう」點を擧げている。欒論文が指摘する兩者の性格および視點の類似性は說得力に富むが、「漱石の「よき日本人」の坊っちゃんと對照的に、魯迅は逆に「惡しき中國人」のすべての惡を阿Qの一身に描いたと言える」という解釋には同意し難い。假に阿Qの性格から「卑劣、憶病、無恥、狡猾、エゴイズム、盲從など、中國人の國民性の暗黑面のすべての要素を見つけることができる」にしても、前述の渥見論文らが指摘する坊っちゃんにおけるコミュニケーション拒否の思考回路を想起すれば、欒論文のように「同じ國民性に對して、漱石は明るい面を、魯迅は暗い面をポイントにおいて描いただけの違い」という總括は難しいのだ。[71]

（五）アンチ淸としての吳媽

平岡敏夫は前述の論文「「坊っちゃん」試論」で、「四國の中學を辭職するに至った熱烈な正義漢である坊っちゃん」が、歸京後に街鐵（東京市街鐵道）の「技手」となった後も、「正義をふりまわして辭職するということにならなければ坊っちゃんという性格の一貫性は成立しない〔中略〕歸京して街鐵にとどまっている坊っちゃんはウソであり、坊っちゃんは死んだのである」と指摘し、「それまでの坊っちゃんが死ぬことによって「東京で淸とうちを持つ」ことは實現する。〔中略〕一擧に淸を死にひき落とすことで、この末尾全體に（ひいては作品全體に）深い哀切感をにじみ出させている」と「坊つちやん」の死と淸の死とを結び付けた上で、二人の愛情關係を次のように考察した。「坊っちゃんのあの單純・痛快にみえる反面にはたえざる强迫觀念・被害妄想の類があった〔中略〕坊っちゃんを支えた淸の愛、淸を信じる坊っちゃんの愛が、ぎりぎりの切實さで蘇ってくる」。[72]換言すれば坊っちゃんは最愛の女性淸の死により生かされているのであり、「古き良き日本人」にして社會とのコミュニケーションを頑なに拒否する天涯孤獨の彼による國民性批評が可能となったのである。なお淸は念願が叶い主人公と同居できたものの、「今年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞」っている。[73]いっぽう、阿Qが心を寄せる唯一の女性が、吳媽である。若い尼僧へのセクハラがきっかけで、死後の供養を託せる息子が欲しくなると共に性欲に目覺めた阿Qは、吳媽に無器用に求愛する。

吳媽は趙家ただ一人の女中で、食後の洗い物が終わったので、やはり長椅子に腰掛け、しかも阿Qと世間話しをしていた。／「奧さまがこの二、三日ご飯を召し上がらないのは、大旦那さまがお妾さんを買おうとして……」／「女……吳媽……この若後家さん……」と阿Qは考えていた。／「家（うち）の若奧さまには八月に赤ちゃんが生まれるって……」／「女……」と阿Qは考えていた。／阿Qは煙管を置くと立ち上がった。〔中略〕「二人で寢よう、俺とおまえで寢よう！」阿Qはいきなり足早に迫っていくと、彼女の前で跪いた。／一瞬シーンとなった。／「キャー！」吳媽はしばしポカンとしていたが、急に震え出すと、叫びながら外に飛び出し、走りながらわめき、それはやがて泣き聲まじりとなった。[74]

吳媽はこの場面で初登場しており、彼女が未亡人となり趙家で働き始めた經緯は語られない。だが魯迅は二年後に短篇小說「祝福」（原題：祝福、一九二四）を發表し、吳媽と同樣「若後家」の祥林嫂の苛酷な生涯を描いて、[75]吳媽の人生を彷彿させている。傳統中國の禮敎は女

性に再婚を許さないため、未亡人の吳媽には大旦那の第二夫人候補となる資格はなく、彼女は趙家の蓄妾騒動を他人ごととして阿Qに漏らしたのである。大旦那の蓄妾と若奥さまの出産という吳媽の噂話に刺激されたのであろう、阿Qは突然跪いて吳媽に敬意を表し眞劍に求愛するのだが、それが餘りにも意外だったのだろう、吳媽は「しばしポカン」としていたが、自らの貞操の危機に氣付いたのだろう、泣き叫びながら逃げ出す——夫の死後も貞操を守って再婚しない節婦、というのが吳媽の品格であり、そもそも趙家が彼女を雇用するのも、彼女が節婦であるからなのだろう。

實は阿Qは跪いただけであり、吳媽に指一本觸れてはいないのだが、若奥さまらは吳媽を慰めて「あんたの身持ちが固いことはみんな知ってるよ‥‥死のうなんて思っちゃいけないよ。」と言う。そして翌日阿Qは一對の赤いロウソク——重さ一斤サイズ——と線香一袋を持って趙家で謝罪し、趙家が道士に依頼する首吊り幽靈のお祓い費用は阿Qの負擔、というセクハラ賠償責務を負うこととなる。この二點から、吳媽が阿Qとの不倫關係を否定し身の潔白を證明するため、自殺を試みようとしていたことが推察できる。しかし實際には趙家では「線香を焚きロウソクを點すこと」もなく、「奥さまが佛様を拜むときに使えるので、備蓄に回し」[76]ているため、首つり幽靈はその後も吳媽の身邊を徘徊していたことだろう。魯迅がエッセー「首つり女」で述べるように、中國には首吊り自殺をした女の游魂は、生きている者を誘って自分と同じ死に方をさせ、自らは來世に生まれ變わる、という信仰があるのだ。[77]

「戀愛の悲劇」とは阿Qの吳媽への求愛の顚末が語られる第四章の皮肉な章題だが、その悲喜劇後も彼は吳媽への思いを斷ち切れず、辛亥革命の噂を聞くや吳媽のことを思い出す。一九一一年一〇月一〇日の武昌新軍蜂起により革命の火蓋が切られてからひと月近くが經過し、革命軍縣城に迫る、という噂を聞いた未莊の阿Qは「革命もいいな‥‥このこん畜生どもの命を革めてやるんだ」と革命黨への加入を夢想する。彼にとって革命とは「欲しいものは俺のもの、好きな相手も俺次第」という殺戮・掠奪・誘拐行爲であった。「秀才の上さんの寧波ベッドを先ず土地神様の祠に運」ばせたのちは「好きな相手」を……と妄想し「趙司晨の妹はひどいブスだ‥‥」と未莊の女性たちを品定めをするうちに吳媽を思い出し、「長いこと會っていないが、どこにいるんだろう——大足なのがイマイチだ」と屈折した片思いを語っている。[78]そして銃殺刑の前に縣城の街頭を引き回された阿Qは、見物人の中に「無意識のうちに」吳媽の姿を認める——

彼がぼんやりと左右を見渡すと、すべて車のあとを着いてくる蟻のような人々で、無意識のうちに、道ばたの群衆の中に吳媽を發見していた。久しぶりだぜ、彼女はなんと城内で働いていたんだ。阿Qは突然意氣地なしの自分が恥ずかしくなった——芝居の一つも唱わないとは。

そこで阿Qは「自己流」で死刑囚辭世の際の決まり文句「二〇年經てば再び男一匹‥‥」を叫ぶのだが、吳媽は「最初から彼のことなど見ちゃあいないようすで、兵士たちの背中の鐵砲に見とれていただけ」であった。[79]鐵砲とは體制的權力の象徵であるとともに、男性器の隱喩であるのかもしれない。このように阿Qの片思いを、首吊り幽靈に取り憑かれた吳媽が徹頭徹尾拒否し續けるようすは、坊っちゃんを淸が終始一貫して愛し續ける姿と眞逆の關係にある。坊っちゃんが淸の死により生かされているのに對し、阿Qは唯一愛した女性から完

全に拒絶されて死ぬのだ。その一方で、清が孤獨な坊っちゃんを愛し、吳媽が群衆の見世物となっている阿Qを無視する行爲は、反主流という共通點を有してもいる。未莊・縣城の群衆は擧人旦那を頂點とする政治經濟および禮敎の權威と、鐵砲に象徵される體制側の暴力裝置により束ねられてはいるものの、地域共同體としての一體感は薄く散漫なものである。阿Q銃殺をめぐる未莊の世論は「阿Qが惡い、銃殺刑がその惡い證據であり、惡くなかったらどうして銃殺などされようか」というお上に對する絶對服從である。そして城內の世論は、革命軍による銃殺は清朝時代の首切りほどおもしろくなく、「あの死刑囚ときたら何たるお笑い種〔中略〕芝居の一つも歌えなかった、ついて回ってくたびれもうけ」という一片の同情も伴わぬ冷笑であった。[80] 群衆の冷酷な反應からは、共同體成員間の一體感の缺如が窺えるだろう。孫文の「中國四億の民は盆の中の散沙に等しい」[81]という言葉が連想される一場である。

國都―省都―縣城というピラミッド狀權力の暴力構造により群衆を統治する清朝と、清朝の奴隸である群衆とは、共に「飢えた狼」であり、その「恐ろしい目」は「鈍くまた鋭利」で、阿Qの「言葉を嚙み碎いてしまっただけでなく、彼の肉體以外のものをも嚙み碎こうとして」いる――阿Qは銃殺刑の前に彼を無視する吳媽に却って誘導されるかのように、精神的勝利法という心理的痲痺狀態から覺醒し、群衆と自己との喰うか喰われるかという關係を認識するのだ。「これらの目は一體化したかのよう、すでにそこで彼の魂に食らいついていた」[82]とは、刑場の阿Qの前に集まった群衆の目の描寫である。一體化した群衆の目は、物語が始まって以來、毆られ叩かれ騙されて肉體を痛め付けられる阿Qを見世物として樂しんできた。阿Qは死刑執行前の引き回しの際でも、「人はこの世に生まれたからには、もとより時には首を切られることもあるだろう」と得意の精神的勝利法を活用し自らの心を痲痺させ、精神を守ってきたが、銃殺直前にようやく覺醒するや、群衆は彼の覺醒した精神をも食らおうとするのである。「彼の魂に食らいついていた」の一句のあとには「「助けて‥‥」／だが阿Qは口に出さなかった。彼はとっくに眼の前が眞っ暗となり、耳はガーンと響き、全身があたかも粉みじんに飛び散ったかのような氣がしていた」という一節が續いている。[83]「助けて‥‥（原文：救命，‥‥）」からは、魯迅のデビュー作「狂人日記」（一九一八）末尾で主人公が呟くように記す「人食いをしたことのない子供は、まだいるだろうか？／子供を救って‥‥（原文：救救孩子‥‥‥）[84]」の一句が連想される。「狂人日記」は辛亥革命後の中國における人間同士の孤獨な關係性を、主人公の狂人が抱く〝食人〟の妄想において集約し、さらに狂人自身にも食人の罪を自覺させることにより、狂人と民衆との罪人としての連帶の可能性を探った哲學的小說である。食人の罪を自覺した狂人が呟く言葉「子供を救って‥‥」に呼應するかのように、阿Qは未莊・縣城における人間同士の孤獨な關係性を〝食人〟と認識し、俺を助けて、という聲をあげたのである。

『阿』とは「狂人日記」以來のテーマを、未莊という村を舞臺に、地主から日雇い農民まで、日本留學經驗者から革命軍人までが阿Qの肉體と精神を食らう樣子と、阿Qが死の直前に幽靈に取り憑かれた女性に導かれて覺醒し、このような食人社會を認識するに至る過程とを物語る小說なのである。この『阿』により魯迅は阿Q像を確立し、中國國民性批判の視座に立ち得たといえよう。

阿Q像とは、以下のように定義できるだろう――通常の名前を持た

ず、家族から孤立し、舊來の共同體の人々の劣惡な性格を一身に集めて讀者を失笑苦笑させたのち、特異な女性に導かれて犠牲死し、舊共同體全體の倫理的缺陥を浮き彫りにし、讀者を深い省察に導く人物。その原型を魯迅は漱石の『坊』に見いだした。前述のとおり漱石は坊っちゃんには名前どころかあだ名さえ與えることなく、清を除く誰ともコミュニケーションを構築させず――數學教師の山嵐とも論理的な對話は成立していない――孤獨な主人公と周圍の人物との一見常識的對應との落差を描いて讀者を失笑苦笑させながら、日露戰爭後に成立した大日本帝國という新興國民國家の國民性を批判した。『坊』では自稱「坊つちゃん」は犠牲死するには至らず、彼に替わるかのように清が急死している。魯迅は『阿』創作に際し『坊』の構造を繼承しつつ、主人公の身分を社會最低層に置き、吳媽というアンチ清的女性を登場させて阿Qに自らの孤獨を自覺させ、死に際の精神的覺醒を得させて食人社會の告發へと導き、『坊』よりも更に深くて鋭い國民性批判の物語を展開したのであった。

なお、アンドレーエフ（一八七一～一九一九）はロシア革命（一九一七）に至る動亂期を背景に、知識人の不安と恐怖の心理を寫實主義・象徴主義の手法を驅使して描いた。このロシア作家に漱石と魯迅が深い共感を示していたことを注記して、本稿の結びとしたい[85]。

注

（1）夏目漱石「入社の辭」、『東京朝日新聞』一九〇七年五月三日、『漱石全集第十一卷評論雜篇』岩波書店、一九六六年、四九三頁。『漱石全集』（岩波書店一九六五～六七年）は以下、『漱石一一評論雜篇』等と略す。

（2）『漱石二三日記及斷片』四〇七、三八一頁。

（3）『漱石八小品集』一五三頁。

（4）八月一三日明石公會堂では牧卷次郎「滿州問題」と漱石「道樂と職業」、八月一五日和歌山縣公會堂では牧「列國の對支那政策」と漱石「現代日本の開化」などの講演が行われ、八月一八日大阪市公會堂では牧が「開會の辭」を述べ、漱石が「道德と文藝」を講演した。

（5）朝日新聞合資會社編『朝日講演集』大阪・朝日新聞合資會社、一九一一年、二〇三～二一一頁。

（6）夏目漱石「道樂と職業」『漱石一一卷評論雜篇』二九五頁。

（7）『漱石一三』六六二頁。

（8）參照 H. N. ブレイルズフォード著、岡地嶺譯『フランス革命と英國の思想・文學』八王子・中央大學出版部、一九八二。

（9）『漱石一三』三九九頁。

（10）『東京朝日新聞』一九〇九年七月四日。同七月七日三頁、『漱石四三四郎それから門』三四三頁。

（11）芥川龍之介「東京小品」の中の「漱石山房の秋」。一九二〇年一月一日『大阪毎日新聞』掲載。『芥川龍之介全集　第五卷』岩波書店、一九九六年、二七七頁。この漱石宅は新宿區早稲田南町七番地にあり、漱石は一九〇七年九月二九日に本郷區西片町から轉居してきた。漱石は〇六年一〇月より毎週小宮豐隆ら學生たちを中心とする木曜會を始めており、同會に芥川は一五年一一月一八日に初めて參加したのだ。

（12）『漱石一三』三九九頁。

（13）述者夏目鏡子、筆錄者松岡讓『漱石の思ひ出』東京・岩波書店、一九二九年一〇月第一刷、二〇〇三年一〇月第一四刷改版、二七五頁。

（14）平岡敏夫・山形和美・影山恆男編『夏目漱石事典』東京・勉誠出版、二〇〇〇、二六一頁。

（15）『漱石の思ひ出』二七四頁。

(16)『漱石の思ひ出』二七五頁。
(17)森田草平編「漱石先生言行錄（未定稿）二　眞面目な中に時々剽輕なことを仰しやる方　山田房子（談）」『漱石全集月報　昭和三年版昭和十年版』岩波書店、一九七六年四月、二〇二頁。
(18)『漱石の思ひ出』五～六頁、一一七頁。
(19)『漱石の思ひ出』一一九～一二〇頁。
(20)『漱石二三』三九七頁。
(21)『漱石二三』四〇〇頁。
(22)小森陽一『世紀末の豫言者・夏目漱石』東京・講談社、一九九九年、一七九頁。
(23)『漱石二短篇小說集』三五一頁。
(24)五女の雛子は「夜の支那人」事件の翌年の一九一〇年三月に生まれたが、一歲で死亡した。
(25)『漱石の思ひ出』二七五頁。
(26)『夏目漱石事典』二六一頁。
(27)週刊朝日編『値段の明治・大正・昭和風俗史　上』東京・朝日新聞社、朝日文庫、一九八七年、三五頁そば一九〇七年および五七一頁巡査の初任給一九〇六年の項目。
(28)石井寛治『情報・通信の社會史』有斐閣、一九九四年、五三頁、二〇五頁。
(29)永嶺重敏『雜誌と讀者の近代』日本エディタースクール出版部、一九九七年、一一～一二頁。
(30)『魯迅全集』第一卷、北京・人民文學出版社、二〇〇五年、四三八～四三九頁。『魯迅全集』は以下『魯迅一』等と略す。日本語譯は拙譯を用いて、『故鄕／阿Q正傳』（光文社古典新譯文庫、二〇〇九年）收錄作品の場合は、「『故鄕阿Q』〇〇頁」と注記する。
(31)太宰治『太宰治全集8』筑摩書房一九九八九、二七七頁。太宰『惜別』の評價に關しては、藤井省三「太宰治の「惜別」と竹內好の『魯迅』」（『國文學』二〇〇二年一二月號「太宰治特集」收錄）を參照。
(32)周遐壽（周作人の筆名）『魯迅的故家』上海・上海出版公司、一九五三年、二〇一頁。
(33)周作人『魯迅的故家』一九〇～一九二頁。
(34)『魯迅四』「我怎麼做起小說來」五二五頁。
(35)『魯迅一〇』二三八～二三九頁。
(36)「クレイグ先生」と魯迅「藤野先生」との影響關係については、平川祐弘が周到に論じている。「クレイグ先生と藤野先生――漱石と魯迅、その外國體驗の明暗」『新潮』一九七三年二月號（同著『夏目漱石――非西洋の苦鬪』新潮社、一九七六年、七～一四八頁に收錄）。「「藤野先生」――留學體驗という緣」『しにか』一九九六年一一月號（同著『內と外からの夏目漱石』東京・河出書房新社、二〇一二年、一五二～一五六頁に收錄）。
(37)周作人『魯迅的故家』一八一頁。伍舍については『魯迅の會會報』第三號（一九八一年）中の岡崎昌史レポートに詳しく記されている。
(38)一九〇六年一二月二六日および一九〇七年九月二八日高濱虛子宛てはがき、一九六六年版『漱石一四』五三三頁、六四五頁。
(39)竹內好「「阿Q正傳」の世界性」『世界小說』一九四八年九月號原載、『竹內好全集』第一卷、東京・筑摩書房一九八一年一月、二三九～二四〇頁。
(40)平岡敏夫「『坊つちやん』の周邊」『國語通信』一九六五年六月。同著「坊っちゃん」試論――小日向の養源寺――」『文學』一九七一年一月號（同著『漱石序說』東京・塙書房一九七六年、七五～一〇三頁に收錄）。
(41)米田利昭「「坊っちゃん」と「阿Q正傳」」伊藤虎丸ほか編『近代文學における中國と日本』東京・汲古書院、一九八六年、一九七、二〇五、二〇六頁。

(42) 潘世聖『魯迅・明治日本・漱石』第九章「價値轉倒の視點と「文明批判」の様相――『阿Q正傳』と『吾輩は猫である』を中心に」二五二頁。潘は同章題と同名の論文を二〇〇〇年に『比較社會文化研究』(九州大學)第八號二三～三一頁に發表している。

(43) 欒殿武『漱石と魯迅における傳統と近代』(東京・勉誠出版、二〇〇四年二月)第二部「漱石と魯迅の近代」第一章「魯迅文學における漱石の投影」二二二頁。欒は同章題と同名の論文を『國際文化研究所紀要』第八號(二〇〇二年一〇月)三五～五一頁に發表している。

(44) 『漱石一六』五一六～五一七頁。

(45) 江藤淳『夏目漱石』東京・東京ライフ社、一九五六年、八一頁。

(46) 井上ひさし「「坊つちやん」――百年の日本人 夏目漱石――」『讀賣新聞』一九八四年一月一一日。引用は『日本文學研究大成 夏目漱石Ⅰ』(國書刊行會、一九八九年、四八頁)より。

(47) 平岡敏夫『漱石序說』九九頁。

(48) 柴田勝二『漱石のなかの「帝國」――「國民作家」と近代日本』東京・翰林書房、二〇〇六年、五二頁、五四頁。

(49) 欒殿武「漱石と魯迅の比較研究の試み:『坊ちゃん』と『阿Q正傳』の接點を中心に」『語文論叢』一九九八年三月、第二五號、四六頁。

(50) 井上ひさし「「坊つちやん」――百年の日本人 夏目漱石――」『讀賣新聞』一九八四年一月一一日。引用は『日本文學研究大成 夏目漱石Ⅰ』(國書刊行會、一九八九年、四八頁)より。

(51) 欒殿武「漱石と魯迅の比較研究の試み」、四三頁。

(52) 江藤淳『漱石とその時代 第三部』新潮社、一九九三年、二五四～二五五頁。

(53) 『漱石二』二四四頁。

(54) 渥見秀夫は四國への赴任が決まった主人公が「清」に別れを告げる際に、「〈清〉は、ここで初めて「坊っちゃん」と呼びかける。ここまで〈おれ〉への〈清〉の言葉は、周到に〈坊っちゃん〉の呼稱拔きで、讀者に届けられていた。」と指摘しているが、漱石による巧みなカギ括弧の用法については指摘していない。(「「坊っちゃん」論――閉じない圓環」『愛媛國文と教育』第二九號、一九九六年、二九頁)。

(55) 『漱石二』三七七頁。

(56) 金澤庄三郎編『辭林』三省堂出版、一九〇七年四月、一三九九・一四二〇頁。

(57) 渥見秀夫「再讀する漱石――自筆原稿での『坊っちゃん』再讀」『愛媛國文と教育』(三九)、二〇〇七年二月、四頁。同著「「坊っちゃん」論――閉じない圓環」(『愛媛國文と教育』第二九號、一九九六年)も參照した。

(58) 成模慶「漱石文學の受容と再生產――「坊っちゃん」の映畫化を中心に」『比較文學研究』78號、二〇〇一年八月、七三頁。

(59) 『漱石二 短篇小說集』二四一、三六七頁。

(60) 周作人『魯迅的故家』二〇一頁。北京魯迅博物館編『魯迅手跡和藏書目錄3』一九五九年七月、四四頁。

(61) 魯迅が北京・八道灣の邸宅で周作人と同居していた時期には圖書を共同購入しており、現代文學を周作人が、古典を魯迅が管理・記錄していたようすで、兩者の購入狀況は魯迅博物館藏『周作人日記(影印本)』上册(鄭州・大象出版社、一九六六)と『魯迅日記』に各々記錄されている。『周作人日記』一九一九年末尾の「八年〔民國八年、すなわち一九一九年〕書目」七月の項目には、「漫畫坊チャン 近藤浩一路／漫畫我〔ママ〕輩ハ猫デアル」と記されている。(『周作人日記』上册四〇、九〇、九一頁)また『魯迅一六』『魯迅日記』三三年四月一七日の記載にも「從內山書店買『新潮文庫』二本」とあり、日記同年篇末に兩書の

書名と値段「〇・三〇」元および購入月日が記されている。（三七二、四一九頁）。

(62) 『魯迅一六』「日記」一九三五年一二月一七日、一九三六年一月三〇日ほか。

(63) 『魯迅一』五〇二頁。『故郷阿Q』五四頁。

(64) 『魯迅一』五二一頁。『故郷阿Q』九〇頁。

(65) 『魯迅一』五三一頁、『故郷阿Q』一〇八頁。原文「本不是大村鎮」は「もともと大きな村や町ではなく」とも翻譯できるが、未莊には酒屋と茶館各一軒の店舗しかないので、中規模の村を想像して良いだろう。

(66) 『魯迅一』五二五頁。『故郷阿Q』九七頁。

(67) 『魯迅一』五一七頁。『故郷阿Q』八二頁。

(68) 『魯迅一』五二四頁。『故郷阿Q』九四頁。

(69) 江藤淳『漱石とその時代』第三部、二五〇頁。

(70) 小野一成「坊ちゃん〔ママ〕の學歴をめぐって」によれば、物理學校とは正式には東京物理學校、現在の東京理科大學の前身であり、「入學は比較的易しいかわり、進級・卒業が非常に難し」く、「坊っちゃん」と同期生は「ストレートで卒業した可能性」は「2割にも満たない數」であり、「最短年數で卒業した坊っちゃんは、實際は大變な秀才」であり、物理學校から送り出された人々は「明治時代を通してトップクラスの帝大出エリートに次ぐ集團を形成していった」。（『坊っちゃん・草枕』一二〇～一二五頁。初出は『戸板女子短期大學年表』一九八五年一〇月）。

(71) 欒殿武「漱石と魯迅の比較研究の試み：『坊ちゃん』と『阿Q正傳』の接點を中心に」三九～四四頁。

(72) 平岡敏夫「「坊っちゃん」試論――小日向の養源寺――」なお平岡が最初に「坊っちゃんの死」を指摘したのは、「「坊っちゃん」試論――小日向の養源寺――」（『國語通信』一九六五年六月、『漱石序説』東京・塙書房、一九七六、收錄）においてである。

(73) 『漱石二』三八二頁。

(74) 『魯迅一』五二六頁。『故郷阿Q』九八頁。

(75) 魯迅の自傳的短篇集『朝花夕拾』には、「養育係」として古手の女中の「お長（原文：阿長）」が登場する。彼女は「おそらく若くして夫に先立たれた後家さん」（『魯迅二』二五五頁。『故郷阿Q』一七五、一八五頁）であり、薛綏之主編『魯迅生平史料匯編』第一卷（天津・天津人民出版社、一九八一年）によれば、彼女には五九という名で裁縫師をしていた養子がいた（二八七頁）。

(76) 『魯迅一』五二七～五二八頁。『故郷阿Q』一〇〇～一〇二頁。

(77) 『魯迅六』六三七～六四二。

(78) 『魯迅一』五三八、五三九、五四〇～五四一頁。『故郷阿Q』一二二、一二三、一二六頁。

(79) 『魯迅一』五五一頁。『故郷阿Q』一四五～一四六頁。

(80) 『魯迅一』五五二頁。『故郷阿Q』一四八頁。

(81) 『孫中山全集第六卷』北京・中華書局、一九八五、四一二頁。

(82)(83) 『魯迅一』五五二頁。『故郷阿Q』一四七頁。

(84) 『魯迅一』四五四～四五五頁。『故郷阿Q』二九一頁。

(85) 參照藤井省三著『ロシアの影――夏目漱石と魯迅』平凡社、一九八五。